ISO/TC46「情報及びドキュメンテーション」の最近の動向

宮澤 彰^{*1}, 菊池文彦^{*2}

Recent activities of the ISO/TC 46 information and documentation

MIYAZAWA Akira^{*1}, KIKUCHI Fumihiko^{*2}

[著者抄録] 情報・ドキュメンテーション分野の国際標準化活動を行っている ISO/TC 46 の最近の動向について紹介する。ISO の組織について簡単に触れ、国際規格の作成手続きを定めた業務用指針(directives)を元に、NP, CD, DIS という作業段階について述べる。さらに 1991 年 5 月にコペンハーゲンで開かれた TC 46 の総会と、SC 2 (翻字), SC 4 (コンピュータ応用), SC 8 (図書館統計), SC 9 (文献の識別と記述), SC 10 (資料の保存) の各会議についてその内容を紹介し、作業中の規格案の現状、方向について記す。特に日本と関係の深いプロジェクトについては詳述し、今後の方向を考える。

[著者付与キーワード] ISO, TC 46, 標準化, 規格制定活動, 国際標準

[Author Abstract] This paper describes the recent activities of the ISO/TC 46 Information and documentation. First, brief introduction to the organization of ISO is made, and the project stages of the standard process, such as NP, CD, DIS are explained according to the ISO directives. Latter half is the condensed report of the 1991 May plenary meeting held at copenhagen. Also the current status of SC 2 (transliteration), SC 4 (computer application), SC 8 (statistics), SC 9 (identification and description), SC 10 (preservation) and their standard processes are reported. Considerations and future prospects are discussed for the issues of Japanese interest.

[Keywords by Author] ISO, TC 46, standardization, standard process, International standard

* 1. 学術情報センター研究開発部 (〒112 文京区大塚 3-29-1) Tel. 03(3942)6955

* 2. 科学技術情報センターパリ事務所

* 1. National Center for Science Information Systems, R & D Department (29-1, 3-chome, Otsuka, Bunkyo-ku 112)

* 2. JICST Paris Office c/o CNRS/INIST 26 Rue Boyer, 75971, Paris Cedex 20, FRANCE
Tel. 1(4358)4659

1. ま え が き

情報・ドキュメンテーション分野の国際標準化活動を行っている ISO/TC46 の最近の動向について紹介する。筆者らは本年(1991年)5月にコペンハーゲンで行われた ISO/TC46 の総会に、日本の代表団の一員として出席する機会を得た。この会議の様相と最近の主な活動内容を記す。本稿が標準化活動に対する理解の助けになれば幸いである。

2. ISO と TC 46

最初に国際標準機構 ISO についてその組織や手続きを紹介する。

2. 1 ISO とは

ISO (International Organization Standardization) 国際標準機構は、1991年現在88か国が参加する国際組織である。JIS マークで知られる日本工業標準に比べると、その日本での知名度は低いかもしれないが、種々の材料、技術等についての国際規格を定め、また各国規格の調整を行っている最大の標準化組織である。

2. 2 ISO の組織

ISO の中央事務局 (Central Secretariat) をジュネーブにおき、総会、理事会および157の分野別の技術専門委員会 (Technical Committee, 以下 TC) からなる。各種標準はこれらの TC で作成される。TC には一連番号がつけられていて、通常これらの番号で呼び、必要があれば分野名称をつける。例えば TC46 (情報及びドキュメンテーション)、TC37 (用語)、TC130 (印刷技術) など。

これらの TC のうち、JTC 1 (情報技術) は ISO と IEC (International Electrotechnical Committee, 国際電気標準会議) との合同技術委員会 (Joint Technical Committee) であり、コンピュータのハードウェアおよびソフトウェアをカバーする大規模な TC となっている。JTC1 の標準

化活動は TC46 分野と密接な関わりを持っている。

TC には幹事国 (Secretariat) と、全般的運営について責任を負う議長 (Chairman) がいる。幹事国は幹事 (Secretary) を出し、TC 全体の専門的管理的任務の責任を持つ。議長は必ずしも幹事国からでるとは限らない。

大規模な TC はさらに分科委員会 (Sub-committee, 以下 SC) に分かれる。SC は TC の分野をさらに細分して受け持つ。例えば JTC1/SC2 (文字セットとコード化)、TC46/SC9 (文献の識別・記述) など。SC にも TC と同じように幹事国と議長がおり、管理的・運営的責任を負う。

SC はプロジェクトに応じてさらに WG (Working Group) を設けることがある。WG には主査 (Convener) をおき、また、幹事を任命することもある。WG では専門家を集めて作業原案を作成する。SC のある場合 WG は SC が設けるが、場合によっては TC が、直接 WG を設けることもある。

各 TC や SC のメンバーは参加国の代表である P メンバー、O メンバーと ISO 内部または外部の団体からのリエゾンメンバーとに分かれる。O メンバーはオブザーバーとしての参加であるが、全文書の配布を受け、意見提出と会議への参加ができる。P メンバーは積極的に業務に参加し、会議への参加も (可能な限り) 義務づけられている。P メンバーと O メンバーに対応してリエゾンメンバーも二つのカテゴリーに分けられている。P メンバーに当たる役割を担う A リエゾンと、O メンバーの位置づけに当たる B リエゾンである。

2. 3 ISO の業務用指針

業務用指針 (Directives) は ISO の組織、国際規格の提案から成立までの業務手続きなどを定めた規則である。1989年に ISO/IEC の共通の新業務用指針が成立し、規格の前段階での呼称などが変更された。

国際規格が成立するまでの手続きは幾通りかあるが、もっとも標準的な手続きでは表 1 のような

段階を経る。

表1 プロジェクトの各段階

最初の段階はNP (New work item Proposal) とよばれる規格の目的および理由などを記した提案書を投票にかけることで始まる。

この投票で承認されるとプロジェクトが登録され、プロジェクトリータが指名されて（一般にはWGで）作業原案（Working Draft, 以下WD）の作成段階となる。

WDが普通はWGで承認されて一応完成すると、これを委員会原案（Committee Draft, 以下CD）としてメンバーに回付し、コメントを求める委員会段階となる。この際投票を行うことも多い。CDは従来DP (Draft Proposal) と呼ばれていたものである。CDはコンセンサスが得られるまで改訂を繰り返す。

CDが承認されると国際規格案（Draft International Standard, 以下DIS）となり、英語、仏語のDISを作成して投票を行う。この段階を承認段階という。投票の結果によっては改訂を加えて再投票を行う。

DISが投票で承認されると中央事務局で発行の手続きに入る。この段階を発行段階という。発行が行われると一つの国際規格が成立する。

以上が、国際規格の成立の標準的な手続きであるが、このほかに現存規格を流用して委員会段階を省略する迅速法による手続き（Fast-track procedure）もある。また、いったん成立した国際規格も5年ごとに定期的に見直しをすることになっており、このための投票や、見直しに伴う改訂等

の手続きも、規格の作成に準じて定まっている。さらに、これらの手続きには文書の配布さきや投票結果で承認される条件、またコンセンサスについてなど事細かに規定してある。

いずれにしても、投票またはコメントを文書で求められるのはNP, CD, DISに対しておよび国際規格の見直しである。これらのうち実質的な審議はCDの段階で行われ、DISに進めるなどの決定はSCの会議で行われるのが普通である。DISとなつてからの投票は承認に関するものであり、コメントも編集上の事項であるのが原則である。したがって、国としての意見を国際規格に反映させるためにはSC, WGレベルの会議に出席して、CDの作成や改訂に意見を述べていくことが大切である。

2.4 文書

これらの業務に使用する文書は印刷されたDIS, CD等のほか、投票用紙、投票結果報告書用紙など様式の定まった文書と、会議の開催通知、議事録、幹事からの報告、メンバーから提出される草稿案、コメントなどである。

これらの文書はTC, SC, WGごとに一連番号がつけられ、たとえばISO/TC46/SC2 N287のようにそのTCやSC番号の後ろにNをつけて表示する。このため、N文書と呼ぶ人もいるが、この番号は、幹事国が管理する。N番号は当然活発なSCほど大きくなっている。委員会段階の作業中にはこのN番号がおもに使われ、たとえばNxxをCDとしてコメントを求める、といった言い方をする。なお、N番号は原案の修正等で内容

表1 プロジェクトの各段階

プロジェクトの段階	関連文書と略称
提 案 段 階	新業務項目提案 New work item proposal NP
作 成 段 階	作業原案 Working draft(s) WD
委 員 会 段 階	委員会原案 Committee draft(s) CD
承 認 段 階	国際規格案 Draft International Standard DIS
発 行 段 階	国際規格 International Standard

が少しでも変われば新しい番号がふられる。このため、Nxx は Nyy の revised version などということもよく起こるし、また、WG の文書が、SC に、そして TC にと回されるときには、最初の WG での N 番号、SC での N 番号、TC での N 番号というように、別の番号がつけられていく。

また、N 番号とは別に、規格の番号、例えば ISO 2709 という番号がある。この番号はプロジェクトが承認され中央事務局に登録された時点でつけられるようであるが、ふつう、CD が作成されて回付される時点で CDxxxxx 番として目にするようになる。この番号は以降 DIS や国際規格になっても、あるいは内容の改訂や修正があっても変わらないで用いられる、規格を参照するための基本的な識別要素である。

3. TC 46

ISO の技術委員会で「情報及びドキュメンテーション」分野を担当する TC46 について紹介する。

3. 1 TC 46 の分野

「情報とドキュメンテーション」という TC46 の分野は、まだ、なじみの深いものとはいいがたいだろう。その概念を言葉で説明するよりは、これまで、TC46 の作成してきた国際規格を見る方が理解しやすいと思う。付録に TC46 の作成してきた主な規格のリスト（英文）を掲げる（524 ページ）。これらの中では、ISBN (2108)、ISSN (3297) が

広く普及しており、よく知られたものであろう。また、いわゆる MARC フォーマットも国際規格 (2709) となっている。

最近の動向、また現在作業中の規格については次節に詳しく述べるが、電子出版に関するもの、国際標準楽譜番号 ISMN、資料の保存に関する規格などが検討されている。

3. 2 TC 46 の内部組織

TC46 の加盟国は現在 P メンバー 27、O メンバー 30 である

表 2 に TC 46 の内部組織を示す。現在議長はイギリスの Verina Horsnell、幹事国はドイツ (DIN) で、幹事を Baxmann-Kraft が務めている。SC は 6 個あり、ほかに TC 直属の WG が一つある。このほかに TC レベルに諮問グループがおかれており、TC の運営に関し議長を補佐している。

3. 3 日本の TC 46 対応

ISO に対して日本は工業技術院に事務局のある日本工業標準調査会 (JISC) が代表である。ISO/TC46 に対する我が国の対応は TC46 国内委員会によって行われている。委員長は藤川正信 図書館情報大学学長であり、事務局は工業技術院標準部情報規格課である。その作業部会は日本電子工業振興協会に設けられている。

日本は TC46 の全 SC に対して P メンバーとして登録しており、さらに、諮問グループに内藤衛

表 2 TC46 の内部組織

名 称	内 容	幹 事 国
SC 2	書き言葉の変換 (翻字, ローマ字化)	フ ラ ン ス
SC 3	用語	ド イ ツ
SC 4	図書館におけるコンピュータ応用	米 国
SC 8	図書館, 情報, 出版関係の統計	英 国
SC 9	文献の識別・記述	カ ナ ダ
SC 10	文献の物理的保存	デンマーク
WG 2	国名コード	ド イ ツ

亮氏（学術情報センター）が参加している。

4. TC 46 コペンハーゲン総会

4. 1 TC 46 の会議

TC46の総会は原則として2年に1度ずつ、5月の後半頃に開かれている。一般にこの総会にあわせて各SCも総会を行う。WGは必要に応じて開かれるが、総会に合わせて行われることも多い。このため1週間を使って月曜から木曜までがWGやSCの会議、金曜日に総会というのが通例となっている。

また、総会の行われない年にはミーティング・ウィークと称して各SCやWGの会議を集中的に行う週が、やはり5月の後半頃にとられる。1990年にはパリのAFNORで5月14日～18日に会議が行われた。92年はロンドンでミーティング・ウィークが予定されている。

1991年はデンマークのコペンハーゲンで5月31日に総会が行われた。場所はデンマーク政府の会議場 Eigtveds Pakhus、コペンハーゲン市内の運河沿いにある18世紀の倉庫を再開発した建造物であった。この週の27日から30日には、SC2、4、8、9、10の総会やWGも同じ場所で行われている。

日本からは、筆者らを含め合計7名の代表団を組織し、この間に行われたほぼすべての会議に出席することを得た。

4. 2 議事次第

この種の会議の議事次第はある種の型があってほかのTCでも似たようなものであるが、今回の各SC総会議事次第から典型的なものを拾い、一般的な議事次第を次に掲げる。

1. 開会
2. 出席者の確認
3. 議事次第の承認
4. 議事録委員会の任命
5. 幹事国からの報告
6. リエゾン団体からの報告
7. 作成中の規格の検討

8. 進展のなかったプロジェクト

9. 定期見直し

10. 新業務項目の提案

11. 組織

12. 次回会議の予定

13. その他

14. 決議の採択

2. 出席者の確認はISOの会議であるから、代表権の確認の意味がある。ふつう自己紹介の形で所属国（組織）と名前を述べるが、議長や幹事は所属国の代表として出席するわけではないので、議長の誰々のように述べる。

議事次第（Agenda）は、会議開催通知と一緒にあらかじめ配布されており、追加または削除する項目や、審議順序変更の提案がなされることもある。議事録委員会は決議事項の起草を行うもので、若干名のメンバーを選ぶ。会議の公用語は英語と仏語であるから、これらを母国語とするものから選ばれることが多い。

以上はいわば最初の事務事項である。ついで、幹事から、そのSCの現状（メンバー、組織、プロジェクト、対応している規格など）についての報告が（文書を用意して）ある。さらに、リエゾン団体や、各国規格についての報告が続く。

7～10が実質的な審議である。この部分は各SCにより、各々抱えているプロジェクトや規格とそのステータスに応じて数項目に分かれる。一般的には投票結果や提出されたコメントについて検討を行う、それに応じてCDやDISに進めるか改訂を行うかなどの結論を下す、といったところが審議の内容である。見直し投票の結果、あるいはそれにもなうコメントも同様に検討される。また、進展のなかったプロジェクトについては促進を働きかける、あるいは取り止めとするなどの結論を下す。

組織という項目はSCの場合プロジェクトに応じてWGを組織する、あるいはWGを廃止する、また、プロジェクトリーグやWG幹事の指名などである。

終わりの事務事項として決議の採択がある。そ

の他事項の終わった後、議事録委員会が集まり、決議事項を文章化する。原則として決議事項は審議の中で議長が順に確認をとっていくので、それらを文章化する。TC46の場合ほとんど英語であるが、英仏両語を用意する場合、例外的に（間に合わなくて一部が）仏語のみの場合などある。文章の起草の間小休憩があり、決議事項を文書で配布して決議の採択を順に行い、閉会となる。

以下、各 SC と総会とについて、会議の模様と最近の動向を紹介する。

4. 3 SC 2

SC2は翻字 (Transcription) を主として扱っている。日本としての最近の関心では、日本語のローマ字化 (ISO 3602-1989) があった。

現在、日本にとっても身近な話題として、韓国・朝鮮語の翻字がある。このプロジェクトは韓国案と北朝鮮案が対立して調整がつかず、足かけ3年以上熱い話題となっている。

4. 3. 1 韓国・朝鮮語の翻字

今年のコペンハーゲン会議では、WG という形でなく、韓国と北朝鮮だけによる話し合いの時間をプロジェクトリーダーの示唆により設けた。プロジェクトリーダーの弁によると「われわれは一切干渉しない。二者で十分議論して欲しい。これは政治的問題ではなく、技術的問題である。Happyendを望む」ということであった。これは、以前から続いている WG での議論が、ともすれば主張の一方通行に終わって実りあるものにならなかったことを配慮したものと思われる。しかしながら、会議以前の調整でなく国際会議の場において、このような手続きをとることは異例であり、また、ISO での手続きの精神からしても、いかがなものだろうか。

技術的な点での対立は、いくつかの子音に対して用いるアルファベットである。韓国・朝鮮語では日本語のような清音／濁音でなく、無気音／帯気音の区別があるが、これをラテンアルファベットでどのように表すかという点で対立している。韓国案は中国語のピンインのようにたとえば“d”

と“t”で区別しようというもので、北朝鮮案はこれを“t”と“th”のように表そうというものである。

北朝鮮側は反対理由として、韓国案は不自然で受け入れ難いと主張している。韓国側はこれに対しピンインの例から十分自然になり得ると主張し、さらに少ない文字数で翻字でき、しかも原綴への変換が容易にできる利点を挙げている。

韓国・朝鮮語の翻字は、韓国人の名刺を見ても容易に知ることができるように、有力な方式がない状態である。米国の研究者や図書館ではいわゆるマッキューン・ライシャワー方式が有力であるが、発音のローマ字化であるため、原綴が復元できるという翻字の原則に対して問題がある。また、米国での研究者の数からいっても、中国研究や日本研究ほどのポピュラリティはないため、ISO の場において有力な方式とはなり得ていない。何よりも最大の当事者である韓国、北朝鮮が、新しい国際的な翻字方式を生み出し普及させようと努力をしている段階であることが、この問題をホットなものとしてきたといえよう。

今回の SC 2 では、韓国・北朝鮮に話し合いの結果が紹介された。いくつかの子音について双方の合意ができたものの、“d/t”、“j/ch”について合意に至らなかったということである。また、合意を得るために次回の SC 2 総会の前にこのプロジェクトについての WG を開くことを要請している。このため、SC としては、この要請を受け1992年5月の SC 2 総会の前、3月ころに WG を行うべく努力することになった。開催場所は北京、パリが候補として挙げられている。

4. 3. 2 その他の規格

現在作成中の規格とその状態を掲げる。

ヘブライ文字の簡略翻字 (CD 259.2) : DIS 化決定。

非スラブ言語のキリル文字の翻字 (CD 2805) : 委員会段階。ISO 9 (キリル文字の翻字) と合わせる方向で検討。

タイ語の翻字 : WD を CD として承認。

非アラビア語アラブ文字の翻字、イディッシュ

の翻字、ナガリ文字の翻字：作成段階であるが、進展無し。

グルジア文字 (CD 9984)、アルメニア文字の翻字 (CD 9985)：委員会段階。

また、NP 提案の前段階として、中国語と日本語の分ち書きについて、フランスから中国および日本に打診があった。日本はこの提案に賛成していない。

4. 3. 3 幹事国の交代

SC 2の幹事国はフランス (AFNOR) が務めており議長もフランスからでている。しかしながら、1990年に AFNOR が幹事国を降りたいと表明。後を引き受ける国がないために今年まで1年間継続するという事態になっていた。

その後Pメンバーから幹事国を引き受けるという申し出がないためどうするかについてが今年の総会で議題となった。結論としては引き受け手がないため、さらに1年フランスが幹事国を続けるということになった。

この問題には背景として、各国の財政事情と、もう一つ SC 2分野の検討内容があると思われる。SC 2は翻字を主として扱ってきたが、ギリシャ語、ロシア語、アラビア語、ヘブライ語、中国語、日本語等少なくとも欧米からみてその主なものは終わっている。現在進められているものは先に見たように少数言語といわざるを得ない。また、最近の中国、日本、韓国、北朝鮮の積極的参加は自国語からラテンアルファベットへの翻字法について強い関心を示したもので、他国語を自国用に翻字することに対する興味からではない。

このため、この翻字分野に対する関心が（国際的に）薄れてきたことは無理のないところであろう。この分野について、また、日本の対応について今後を問われる時期になってきていると考えている。

4. 4 SC 4

SC4は図書館におけるコンピュータ利用を扱っている今回二つの WG (WG1, WG6)、一つのアドホックグループ、TC37とのジョイント WG、お

よび、総会をこの1週間のうちに開催した。SC4の幹事国は米国、議長は米国議会図書館の Sally McCallum が務めている。

4. 4. 1 WG 1

WG1は文字コードを扱っている。書誌用文字セットという名称で、ダイアクリティカルマークのついた（ウムラウトやアクサン）ラテン文字をはじめ、キリル文字、拡張キリル文字などの規格を定めてきた。

日本と関係の深い最近の問題点としては漢字のコード化の問題がある。漢字コードを業務項目として取り上げようという話が米国からでたのは2年前のことであった。米国内で RLG (Research Libraries Group) や LC (議会図書館 Library of Congress) の使用している3バイトのコード系を米国の書誌用文字セットの規格としこれを ISO 化しようと考えたのではないかと想像している。これに対し、日本は反対し、JTC1/SC2で進めている Universal Coded Character Set (現在 DIS 10646, 当時はまだ DP) に一本化するべきであるという主張を続けてきた。

米国およびヨーロッパの TC46関係者は JTC1 の10646に対して、フローティングアクセント（ダイアクリティカルマークなどを独立のコードを与えてコーティングし、これとベースとなるアルファベットを組み合わせでウムラウトなどを表す方法）の不採用に関して強い反対意見を持っていた。また、米国および中国は10646の中に、日本と中国と韓国の標準文字セットが別々に埋め込まれて重なった文字があると主張して、この点でも強く反対していた。

今年の会議では状況はかなり変わってきており、米国、中国を含めて10646への一本化の方向で動くようになってきた。このため、今回の WG では10646に対する TC46/SC4のコメントをまとめて JTC1に送るための作業を行った。結果としてのコメントにはフローティングアクセント、キリル、アラビア文字の文字レパートリー、統合化された漢字などを含んでいる。

漢字の総合化については情報処理学会に

JTC1, TC46その他の国内の関係者を集めた漢字標準化専門委員会が設けられ、中国、韓国、米国を含めた国際会議(CJK-JRG)が7月に開かれる予定になっているが、細かい点についてはこの報告では触れない。なお、今回のWGでもCJK-JRGは関心と呼んだ。

SC4で作業中の文字セット規格とその作業状況を以下に掲げる。数字用文字セット(DIS 6862.2)発行段階へ、グラゴル文字セット(DIS 6861.2)発行段階へ、非スラブ系言語キリル文字セット(CD 10754) DISへ、拡張アラブ:CD投票へ、ヘブライ文字セット(CD 8957) DISへ、音標文字セット:取消。

4. 4. 2 WG 6

WG6は電子出版について扱っている。SGML(Standard General Markup Language)の応用として、電子原稿の記述様式と、文字エンティティ(SGMLにおける外字等の文字の統一的表記法)に関する業務項目が従前より検討されており、また、米国より規格と雑誌論文に対するSGML応用についての新しい業務項目提案が出されている。

結論から述べると、電子原稿の記述様式の業務項目に関し、アメリカ出版協会AAPが作成し、米国の国内規格Z39.55となっているものを、迅速法手続き(Fast Track Procedure)により進めることになった。その他の業務項目については実質的な進展はみられず、米国の提案した新しい業務項目は継続討議となって、NP投票にいたらなかった。

このWGでは米国が業務項目を提案して主導的に動き、フランスがそれに対して疑問を投げる、という構図で進んでいる。例えば、今回の米国からの新しい業務項目提案は、規格の文書の論理構造や、雑誌論文の論理構造についてのDTD(Document Type Definition, SGMLにおけるタイトル、章、節など文書の構成部分と、その並びかたの定義)を決めようというものであったが、フランスから図書館の機械化とどの程度関係あるかなどの疑問が出された。米国側としても、この業務

項目について十分内容のわかる文書を用意していないため継続討議となったものである。

4. 4. 3 バーコードアドホックグループ

バーコードの応用として、ISBNだけでなく、流通のための情報や書誌事項を入れるような応用を考え、このために必要な技術的方式の評価や環境の調査を行うことになった。

4. 4. 4 TC 37/SC 2とのジョイントWG

TC37は用語分野のTCであるが、このジョイントWGはTC46/SC4と合同でCD 11639(アルファベット3文字の言語コード)について検討している。この分野ではすでにISO 639(アルファベット2文字の言語コード)があり、11639に対しては多くのコメントが寄せられている。

これらのコメントについて検討が行われたが、具体的な結論に至らず、決議事項としては、この規格に関するアドヴァイザリグループの再編が決定されただけであった。

4. 4. 5 SC 4総会

SC 4の総会ではWGの結論の承認が主な事項であったが、総会での検討事項の中で日本にも関心の深い事項として2709(磁気テープによる書誌情報交換用フォーマット、いわゆるMARCフォーマット)の定期見直しの結果があった。

この定期見直しの結果は、Pメンバー19か国中8か国の賛成で過半数に至らなかったため、見直しについて討議された。ソ連からはフロッピーディスクなど、磁気テープ以外の媒体にも使用できるような改訂をとという意見が出され、米国からは(実質はこのままで)書誌情報以外、磁気テープ以外に適用できるような名称と適用範囲の変更をとという意見が出された。また、ドイツからはこの規格はこのままとしても、その他の媒体等のための新しい開発が必要であるとの意見が出された。

日本はコメントなしで見直し不要の投票を行っている。この結論の背景として、2709は時代遅れで複雑であり、書誌情報以外やフロッピーディスクにまでこのようなものを適用したくない、一方、磁気テープでの書誌情報交換用としては、国内に

においても定着しており、改訂を加えて混乱を起こすことは望まない、という判断があった。この点、ドイツの立場が日本と似ており、2709の適用を拡大しようとする米国とは立場を異にしている。

今回の総会では結論がでず、さらにコメントを文書で求めることになった。日本の立場を主張するとともに今後の進め方に注意していく必要がある。

その他の事項では議長 Sally McCallam の任期延長(3年間)があった。SC4の運営は残念ながら順調とはいえないように感じられる。例えばWG6にしても、2年間会議が開かれず、主査が今回出席していなかった上、文書もほとんど配布されていない。また、SC4全体として、JTC1と重複した問題を扱っているが、調整がうまくなされているとはいえない。

一方、この分野は日本でも最近急速な進展を見せてきており、利害関係も大きくなってきている。この点から、日本の、より積極的な専門的貢献が期待されている。しかしながら、日本の対応は従前に比べれば改善されてきてはいるが、専門家の数や標準化に対する基盤の弱さから、いまだ十分な対応のできる状態には至っていない。

4. 5 SC 8

SC8は図書館統計を扱っており、幹事国は英国、議長も英国の MacDougall が務めている。

すでに図書館統計(2789)を規格化しているほか、図書館資料の価格指標(9230)と図書・新聞・雑誌・電子出版の生産流通統計(9707)が発行段階にある。今回は図書館のパフォーマンス指標に関するNP投票が主な事項であったが、全Pメンバーの賛成を得て承認され米国、英国、フランスで小WGを組織し検討を始めることになった。

4. 6 SC 9

SC9は文献の識別・記述という分野名を持っているが、ISBN、ISSNをはじめ目録や索引の関連など図書館には最もなじみの深い分野の標準を広く扱っている。扱っている業務項目の数も多く、

TC46の代表的分野と言ってよいかも知れない。幹事国はカナダ、議長は R. Manning。

今回の会議では総会およびアドホックグループ四つを行った。作成中の規格だけで6件、NPが5件審議された。

作成中の規格のうち国際標準楽譜番号(International Standard Music Number, 以下 ISMN) CD 10957は技術的な問題点と登録機関の未決定のためにCD段階で再検討することになった。技術的な問題点は英字M番号の一部としたときのチェックディジットの問題と、バーコードの問題である。

その他の作業中の規格のうち進展のあったものは2件ある。略語化規則(DIS 832)の改訂は6か月投票にかけることになった。規格類の目録の表現(DIS 7220)の編集上の改訂を加えて、国際規格に進めることになった。

索引作成のガイドライン(CD 999)、書誌用語の略語(技術報告書 DTR 11015)、電子文書の引用(CD 10956)については検討の継続となった。DTR 11015はDIS 832の4～6節を削除して技術文書(Technical Report)として扱うことになったものの案(Draft)である。

NPで業務項目として取り上げられることになったものは「科学技術文書における物質の属性を表す数値データの表記」に関するものである。数値データベースとからむ話であり、範囲を明確にすることから始めることになった。

全国書誌に関する3件のNPはIFLAのガイドラインとの調整が問題となり、業務項目としては取り上げず、必要があればIFLAのガイドラインを迅速法手続きに乗せる方向で進めることになった。

なお、ISO R/30-1956書誌票(Bibliographic Strip: 雑誌一号の表紙に印刷する識別表示)は見直しの結果廃棄された。實際上まったく使われていないものである。

SC 9は、目録や索引について細かいレベルでのコメントが多い世界である。また、それに伴い審議も負担の大きいものとなってきている。この

ため、米、英、カナダ、フランスなどの先進国が新しい業務項目に対して反対・棄権する傾向が強まっているという。日本の今後の対応もこれらの状況を見ながら進めていく必要がある。

4. 7 SC 10

SC10は文献の物理的保存を担当する新しいSCである。幹事国はデンマーク、議長は今回から新しくノルウェーの R. Dahlo が就任した。

SC10の最初の業務項目は、図書館資料のための紙の耐久性 (Permanence) であった。今回の会議で、この名称がドキュメントのための用紙、耐久性の仕様 (Paper for documents. Specification for permanence) と変えられ、CDが準備できる段階となった。

このほかに、三つのプロジェクトが今回発足した。紙の上に書く、印刷、コピーする媒体の耐久性 (Permanence of writing, printing and copying media on paper documents. Requirements and testing methods) について、保存場所について (Document storage requirements)、製本について (Recommendation of binding materials and binding practices) の三つであり、それぞれWGが組織された。

SC10は新しい分野である上に、例えばWG1の内容は製紙業界に大きくかかわる。新しいプロジェクトも関連する工業界とのかかわりがでてくる。しかも図書館側での専門家は国内には多くない状況であり、こうした条件の中で今後の参加形態を検討して行かなければならない。

4. 8 諮問グループ

諮問グループ (AG) には日本から内藤委員が参加している。AGで取り上げられるのはTCの運営についてであり、今回の議題の大きなものは、業務用指針のTC46用のものについてであった。ISO/IECの新業務用指針が大きすぎて煩雑であるため、TC46の環境に合わせた独自の実用版を作成しようという考えである。今回のAGに草案が提示された。

もう一つの大きな議題がJTC1との調整であった。主としてSC4の分野で調整を必要とする項目が多くなっている。

4. 9 総会

各SCの総会が終わった後で行われるTCの総会は、実質的な討議は少なく、各SC、WG、リエゾン団体からの報告と、各SCからの勧告にともなってTCレベルで決定する決議が主な内容である。

決議事項はSC4からのJTC1とのリエゾンに関するもの、SC9から出されたISMNとISRNの登録機関を外部団体に打診等すること、同じくSC9から出されたISO R/30の廃案、TC37とのISO 639に関するもの、各SC、AGの議長、幹事国、メンバーの任命に関するものであった。

以上の実質的な決議事項に加え、ホスト国であったデンマークへの感謝や、議長、幹事への感謝といった儀礼的な決議を可決し、1993年ベルリンでの次回総会を決めて総会は散会した。

5. 終 わ り に

ISO/TC46「情報及びドキュメンテーション」の今後の会議の報告を中心とし、ISO/TC46の組織や会議、標準化の手続き等を解説し、この分野の標準化の最近の動向を紹介した。

国際標準化は従来日本で関心のあまり持たれなかった分野であり、また、特に、工業分野に比べ、情報とドキュメンテーションというこの分野では手薄であった。このことはコンピュータを主とした情報技術の分野であるJTC1と比べてみると歴然としている。

しかし、この報告の中でもでてきたように、図書館やドキュメンテーション分野も国際的な流通を扱う以上、国際標準化は必須の条件である。特に、情報流通の機械化、データベースかが進展すると共に、「読めばわかる」式の情報流通は不可能になってきており、情報の表記、表現に関して標準化を行う必要性はますます強まっている。また、

この分野は当然 JTC1 の扱う情報技術の標準とも深く関連し、その分野との連携をとっていく必要性は高い。特に日本は JTC1 分野での国際的役割は大きく、TC46 分野でも日本に対する国際的期待は高まっている。

この分野の国内の対応は最近ようやく充実の方向へ向かい始めたところである。かつては工業標準である JIS にこの分野の規格を取り上げることとはなじまないとされてきた。ISO の TC46 が ISO の 4 番という規格番号を持つほど古い歴史を持っているのとは対照的である。その中でこの分野の標準化は科学技術情報流通技術基準 (SIST) として努力が続けられてきた。

しかしながら、最近になってこの分野も JIS に取り上げられるようになった。国名コード (JIS X 0304-1988 ; ISO 3166) をはじめ、ISBN (JIS X 0305), ISSN (JIS X 0306), 雑誌名の情報交換用略記法 (JIS X 0801-1989 ; SIST05 ; ISO 4) な

ど制定され、標準化の重要な分野として認識され始めている。

今年の総会に日本から 7 人の代表団を組織できたことは、この方向に沿うものである。しかしながら、まだ、国内で関心を持つ専門家の数は足りず、分野によっては国内での検討基盤をほとんど持たずに単に情報収集のために出席することを余儀なくされる。そして、それが日本の産業界にとっての利害のある分野であることも多い。

本稿が国際標準化への関心を少しでも高め、こういった状況を改善することに寄与することを望みたい。

おわりに、本稿は今回の代表団の報告書にそのほとんどを負っている。筆者ら以外の名を記して謝辞とする。上田修一 (慶応大学文学部), 牛崎進 (立教大学図書館), 杉山時之 (国立国会図書館), 内藤衛亮 (学術情報センター), 渡辺信一 (大日本印刷)。

参 照 文 献

- 1) 上田修一 倉田敬子 真弓育子, 規格・標準, 図書館情報学ハンドブック, 東京, 丸善, (昭和 63 年), p. 1116-1130
- 2) 科学技術庁科学技術振興局, SIST ハンドブック, 東京, 日本科学技術情報センター (1988), 03 340p.
- 3) 中村幸雄, 科学技術情報流通における標準化, 情報管理, Vol. 31, No. 3, p. 199-211, (June 1988).
- 4) 工業技術院標準部標準課普及班, 我が国の工業標準化 '91, (平成 3 年 6 月) 19p.
- 5) 情報技術標準化研究会編著, 情報技術の標準化, 東京, オーム社, (昭和 61 年), 246p.
- 6) 内藤衛亮, 標準化活動から見た SIST13, 書誌索引展望, 第 14 巻第 4 号, p22-26, (1990 年 11 月).

付録 ISO/TC46 の主な規格

Work	Item #	ISO #	Date	Title
1	SC9	4	1984	Rules for the abbreviation of title words and titles of publications
3	SC9	8	1977	Presentation of periodicals
5	SC2/WG1	9	1986	Transliteration of Slavic Cyrillic characters into Latin characters
54	SC9	18	1981	Contents list of periodicals
14.1	SC9	214	1976	Abstracts for publications and documentation
13	SC9	215	1986	Presentation of contributions to periodicals and other serials
16.1	SC2/WG2	233	1984	Transliteration of Arabic characters into Latin characters
17.2	SC2/WG3	259	1984	Transliteration of Hebrew characters into Latin characters
4	SC9	690	1987	Bibliographic references - Content, form, and structure
25.1	SC9	832.1	1989	Bibliographic description and references - Rules for the abbreviation of words
25.2	SC9	832.2	1989	Bibliographic description and references - List of abbreviations of words
15	SC2/WG5	843.2	1990	Transliteration of Greek characters into Latin characters
18	SC9	1086	1988	Title leaves of books
28	SC9	2108	1990	International Standard Book Numbering (ISBN)
40	SC9	2145	1978	Numbering of divisions and subdivisions in written documents
24	SC9	2146	1988	Directories of libraries, archives, information and documentation centres and their data bases
26	SC9	2384	1977	Presentation of translations
42	SC4/WG4	2709	1981	Format for bibliographic information interchange on magnetic tape
44.1	SC9	2788	1986	Guidelines for the establishment and development of monolingual thesauri
23	SC8/WG2	2789	1988	International library statistics
39.1	WG2	3166	1988	Codes for the representation of names of countries
39.2	WG2	3166.2	1985	Codes for the representation of names of subentities
38	SC9	3297	1986	International standard serial numbering (ISSN)
21	SC2/WG7	3602	1989	Romanization of Japanese (Kana script)
61	SC9	3901	1986	International Standard Recording Code (ISRC)
41	SC9	5122	1979	Abstract sheets in serial publications
45	SC9	5123	1984	Headers for microfiche of monographs and serials
30.1	SC3	5127.1	1983	Vocabulary - Pt.1: Basic concepts
30.2	SC3	5127.2	1983	Vocabulary - Pt.2: Traditional documents
30.3	SC3	5127.3	1988	Vocabulary - Pt.3: Iconic documents
30.6	SC3	5127.6	1983	Vocabulary - Pt.6: Documentary languages
30.11	SC3	5127.11	1987	Vocabulary - Pt.11: Audio-visual documents
30.5	SC3	5127.31	1981	Vocabulary - Section 3a: Acquisition, identification, and analysis of documents and data
65.1	SC4/WG1	5426	1983	Extension of the Latin alphabet coded character set for bibliographic information interchange
111	SC4/WG1	5426.2	1990	Extension of the Latin alphabet coded character - Pt. 2: Latin characters used in minor European languages
65.2	SC4/WG1	5427	1984	Extension of the Cyrillic alphabet coded character set for bibliographic information interchange
65.3	SC4/WG1	5428	1984	Greek alphabet coded character set for bibliographic information interchange
63	SC9	5963	1985	Methods for examining documents, determining their subjects, and selecting indexing terms
44.2	SC9	5964	1985	Guidelines for the establishment and development of multilingual thesauri
55	SC9	5966	1982	Presentation of scientific and technical reports
19	SC9	6357	1985	Spine titles on books and other publications
65.4	SC4/WG1	6438	1983	African coded character set for bibliographic information interchange
65.6	SC4/WG1	6630	1986	Bibliographic control characters
20	SC2/WG6	7098	1982	Romanization of Chinese
75	SC9	7144	1986	Presentation of theses and similar documents
43.1	SC9	7154	1983	Bibliographic filing principles
76	SC9	7275	1985	Presentation of title information of series
43.2	SC9	8393	1985	ISO bibliographic filing rules (International Standard Bibliographic Filing Rules) - Exemplification of bibliogra...
78.1	SC4/WG7	8459.1	1988	Bibliographic data element directory - Pt.1: Interloan applications
78.2	SC4/WG7	8459.2	1988	Bibliographic data element directory - Pt.2: Acquisitions applications
78.3	SC4/WG7	8459.3	1989	Bibliographic data element directory - Pt.3: Information retrieval applications
95	SC4/WG5	8777	1988	Commands for interactive text searching
65.8	SC4/WG1	8957.2	1989	Hebrew alphabet coded character sets for bibliographic information interchange
109	SC9	9115	1987	Bibliographic identification (biblid) of contributions in serials and books
100	SC8/WG3	9707	1988	Documentation Statistics on the production and distribution of books, newspapers, periodicals and electronic publications
104	SC9	10324	1989	International holdings statements
115	SC9	10444	1989	International Standard Technical Report Number (ISRN)
121	SC9	10445	1989	Preparation of manuscripts or computerscripts for publication